

まいにち学校
まいにち街の中
こともの笑顔に
つなげる

はじけるこころ

Vol.30

リニューアル
したよ!!



多民族フェスティバル
「ピニャータわれろ！エイッ！」

げんげのとは：蓮華草が生い茂った草原のこと。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を咲かせます。また、れんげ草は緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子どもたち一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました



素敵な出会いの日
「見て見て！ハングルで書いたネームプレート」

特集1 多文化との出会い・つながりの創造
箕面市国際交流協会 河合大輔さん

箕面市立南小学校 横岩直子さん
いきいきさわやかに学ぶ会

特集2 連載 わたしの人権教育 箕面市立第二中学校 西川ひとみさん
学校のお宝発掘（2）「人権教育教材集・資料」
考えてみよう「ボクの学校、わたしの学校、みんなの学校」
かわのひでただ

聴かせてよ「子どものきもち」

… 1 P

… 3 P

… 5 P

… 6 P

… 7 P

… 8 P

げんげののペえじ みのおから世界へ！人権文化の花束を！

聴かせてよ 子どもの気持ち

外国にルーツを持つ子どもたちは、どのような思いで学校生活を送っているのでしょうか。今回、外国にルーツをもつ子どもたちが数多く在籍する、豊川南小学校の日本語教室で勉強している子どもたちにお話を聞きました。

(質問)

- A どの国に住んでいましたか
- B 日本に住んで何年目ですか
- C 日本にきてびっくりしたこと
- D 岡村先生の作ってくれる（挿絵が多い）プリントが好き
- E すぐ仲良くなれなかったけれど、今は休み時間にいっしょに遊んでいる
- F その他

- A モンゴル B 1年目
- C 双子の兄弟が同じクラスじゃなかったこと
- D 岡村先生の作ってくれる（挿絵が多い）プリントが好き
- E すぐ仲良くなれなかったけれど、今は休み時間にいっしょに遊んでいる
- F 日本もモンゴルも同じくらい好き 帰りたいとは思わない

- A インドネシア B 2年目
- C とっても寒いこと 空港が海の上にあること
- D 日本に来る前も勉強していたし、家でも勉強している通訳の人がいてうれしかった
- E すぐに話しかけてくれる子がいて、うれしかった
- F 大きくなったらインドネシアに帰りたい 大好きな虫がいっぱいいるから

- A エジプト B 4年目
- C みんなが頭になんにもかぶっていないこと
- D 日本語教室で勉強するのが楽しい 日本語も分かるようになっておねえちゃんとけんかをするときも日本語が入る
- E 友だちはすぐできた
- F おもちを初めてついた 思つたより軽くてかんたんにつけて きなこもちが好きで家でも食べている

- A イギリス B 1年目
- C ない 前から何度か来ていた
- D 書くのはかんたん 話すのがむずかしい 図工で絵の具で絵を描くのが好き
- E 友だちはすぐできた
- F おもちを初めてついた 思つたより軽くてかんたんにつけて きなこもちが好きで家でも食べている

- A ロシア B 3年目
- C ない
- D 日本語が分かってきた
- E 友だちがいっぱいいる おにごっこや ドッジボールをして遊んでいる 家ではロシア語で話している
- F おにいちゃんとはけんかをするけれど、クラスの友だちはしたことがない

人権教育推進会議情報誌『はじける こころ』

発行 箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会

人権教育課 TEL 072-724-6921 FAX 072-724-6010
e-mail : edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成24年（2012年）1月

人権教育推進会議委員

八木晃介、河野秀忠、蒲隆夫、安東由紀子、小島敦子、西村和浩、上田晃江、守帰朋子、永田千砂、小関政子、奥谷俊彦、結城美保里、卯滝勢津子、山下晴久、山北智、森崎直幸



多文化との出会い・つながりの創造

箕面市国際交流協会 河合大輔さん
箕面市立南小学校 横岩直子さん

箕面市には現在約80カ国2300人の外国人市民が暮らしており、市内の多くの学校園所に外国人にルーツを持つ子どもたちが通っています。

今回は箕面市で取り組まれている多文化共生の取組をご紹介します。

箕面市には現在約80カ国2300人の外国人市民が暮らしており、市内の多くの学校園所に外国人にルーツを持つ子どもたちが通っています。

今回は箕面市で取り組まれておる多文化共生の取組をご紹介します。

多民族フェスティバル

「あなたも私もおとなりさん！みんなでつくる、多“文化の日”」を合言葉に11月23日、東生涯学習センターで多民族フェスティバル2011が行われました。主催は箕面市国際交流協会です。

当日は、メナシコ、ロシア、バングラデッシュ、モロッコ…といった各國の料理屋台が所狭しと並びました。中でも人気だったのがベラルーシのポテトパンケーキ「ドラ二キ」。口コミで評判が広がり、あつという間に完売しました。雑貨

や民芸品を扱ったフリーマーケット、

ベリーダンスなどの舞台パフォーマンスや展示など内容もバラエティーに富み、多くの市民が「多文化との出会い」を楽しむ姿が見られました。また、民族衣装を着た人は抽選券がもらえるということもあって、様々な国の服を着た来場者でにぎわいました。

メキシコくす玉「ピニャータ」割り

2006年度に始まった多民族フェスティバルは今年で4回目。サントラムで多民族フェスティバル2011が行われました。主催は箕面市国際交流協会です。

メキシコのくす玉「ピニャータ」割りの様子 中にはお菓子が入っています。高学年以上は目隠しの上、作ってからたたくのはすいか割りそっくり。頑丈に作られたピニャータが割れたときには、なんとも言えない一体感があたりを包みます。



の「つながり」など、祭りがなされました。
大切なことを象徴的に示すアートとなりました。

や民芸品を扱ったフリーマーケット、ベリーダンスなどの舞台パフォーマンスや展示など内容もバラエティーに富み、多くの市民が「多文化との出会い」を楽しむ姿が見られました。また、民族衣装を着た人は抽選券がもらえるということもあって、様々な国の服を着た来場者でにぎわいました。

今年の新たな取組

今年の新たな取組は、市内8つの学校園と連携して取り組まれた「布アートプロジェクト」。子どもたちが人の絵と「友だち」、「こんなには」「ありがとう」などの自分の好きな言葉を一人一枚の布に書き込みます。その言葉は、ゲストティーチャーの外国人市民から教えてもらいました。

会場付近に連ねられた布は1000枚を超えて、お祭り気分を盛り立てていました。また、布の数だけの「出会い」や、連ねた布で表された多様なルーツをもつた人たち

を物々交換できる「かえり」のコーナーで使うことができるとあって、多くの子どもたちがクイズラリーに参加していました。

世界のクイズラリーでは、四文字熟語が並んだ中から中国語の「カコーラ」を当てる、韓国・朝鮮語でスタッフとじゃんけんをして勝つなどして、ポイントを貯めます。ポイントは、持ってきたおもちゃを物々交換できる「かえり」のコーナーで使うことができるとあって、多くの子どもたちがクイズラリーに参加していました。

(担当 河合さんに聞きました)

(多民族フェスティバル感想)

外国人にルーツをもつ多くの方々と箕面市民が一緒になつて、母國の文化を披露されていました。日本人の同調意識というのではなく、他の国以上に強いと外国籍の方からよく伺います。

箕面の教育は、これからも是非、違いを認め合うことに重点的に取り組んで欲しいと思います。

人権教育推進会議 委員 安東美紀子

今回も在日韓国人保護者会・トリッキの会として屋台を出店しました。多くの外国人市民が参加していましたが、それ以上に幅広い年齢層の日本人の方々が大勢参加していましたことが印象的でした。

地域の多くの日本人に、箕面に住むいろんな国の人や文化に関心を持つて欲しい。人種や文化の違いを受けとめて、「おとなりさん」として助け合い、支えあえる町を作りたい。お祭りがその一助となれば……。そう思って参加している私にとってはなによりうれしいことでした。



(担当 横岩さんに聞きました)

外國にルーツをもつ子どもたちの中には、自分のルーツが周りに理解されなかつたり、からかいの対象になつたりしてストレスをかかえている子どもがたくさんいます。外國人のスタッフと学校を訪問する際には、周りの子どもたちが文化のちがいを当たり前前のものとして理解し、尊重できるように内容を工夫しています。

今後も、学校の集団づくり・人間関係づくりの取組と連携し取組んでいきたいと考えています。

体験活動は学年ごとにテーマとなる国が異なります。2年生は地域の読書ボランティアグループとんじんどんせんとの協働授業を経て、3年生は『木かげでひのつ』や『おばけのトック』の本を通じて韓国・朝鮮の文化に触れてこの日を迎えたのです。

韓国の伝統衣装を着せてもらつた3年生たちは「芸能人になつたみたい」脱ぎ満悦の様子。自分の着る番が終わつても、名残惜しそう

に着付け姿に見入っていました。

見ているうちに着付けの手順を覚え、友だちの着付けを手伝う様子も見られました。

活動後の感想には、「すてきな出会いの日をきっかけに、その国をもっと知りたくなつた」「その国に行きたくなつた」「教えてもらつた食べ物を作つてみようと思つ」といった心の声が伝わってきました。

(担当 横岩さんに聞きました)

外国人にルーツをもつ人に出会い『違いを豊かさに』を感じる共生の心を育むことをねらいに取組を始め、今年で15年目になります。

15年続いた取組ですが、よりよいものをめざして、来年度は見直しも考えてします。どのタイミングでゲストティーチャーと出会い方が効果的なのが、学年の取組によって違います。子どもたちにとってより実感の伴つた取組となるように、年間の多文化共生の取組の中で適切な時期に出会いの場を設定していくと思います。



人権教育推進会議 委員 上田晃江



人権教育推進会議 委員 上田晃江

今年の新たな取組は、市内8つの学校園と連携して取り組まれた「布アートプロジェクト」。子どもたちが人の絵と「友だち」、「こんなには」「ありがとう」などの自分の好きな言葉を一人一枚の布に書き込みます。その言葉は、ゲストティーチャーの外国人市民から教えてもらいました。

会場付近に連ねられた布は1000枚を超えて、お祭り気分を盛り立てていました。また、布の数だけの「出会い」や、連ねた布で表された多様なルーツをもつた人たち

考えてみよう

お3
大きな地震がきた後、チヨーすごい津波がきたんだよ。先生が、「みんな、津波が来るから、逃げるぞ」って、ボクたちを裏山に引っ張つて行つたんだ。クラスの友だちに、車イスを使つているチヨちゃんがいるんだけど、みんなで代わりばんこで、車イスを押したり、かついだりして、ふうふうで、裏山の道をのぼつたんよ。だからボクたちのクラスは、逃げるのがビリッけつだつた。山の上の広場について、ふりかえると、ボクの学校の屋上まで、海の水にのみこまれているのが見えた。みんな、顔真っ青で、足がガタガタふるえてた。

先生たちのおかげで、ボクの学校では、津波に流されたひとは、いなかつたけど、そのかわりに、学校はつぶれてしまつたし、お家や、家族のひとが流されて、悲しい目の色をした友だちがたくさんいる。大人たちは、あまりに大きなことが起こつたので、みんな疲がれてる。ボクの家族は、なんとか無事に逃げたんだけども、お家は、流されてなくなつてしまつた。今は、仮設住宅でみんなと一緒に暮らしているんだ。

また、雪がさんさと降る季節になつた。3・11のときにも、雪が降つてたなあ。

- 3・11の東日本大震災で困っている子どもたちとつながって、みんなで、応援します。
- どうのような応援ができるのか、先生とクラスで話し合いましょう。
- これからも��けて、自然災害のこと、3・11のことを忘れないようしましょう。
- 防災のことを考え、防災訓練にも、積極的に参加しましょう。
- にんげんにとつて「一番大事なもの、「いのち」について考えます。

「ぼくの学校、わたしの学校、みんなの学校」

二十九

ボクの学校はつぶれてしまったから、遠く
のちがう学校で勉強してるんだ。
元の学校で、元の友だちと遊びたいなあ。
元の学校に行きたいなあ。

したちの学校は、発電所の近くにあるから、みんな避難^{ひなん}した。先生も、子どもたちも。だから今は、わたしたちの学校は、からっぽ。わたしも、みんなも、遠い町に逃げているか

「この「ことば」を教えるときがある。」「女らしさ」「男らしさ」などが活用の例として挙げられることが多いことばです。そのときは必ず「先生は女らしくない人がいてもいいと思うし、男らしくしない人がいてもいいと思うんだけど。」、「子どもらしくしないで押しつけられたら、みんなはどうんな気持ちがする?」などと生徒たちに話すようにしています。「らしい」ということばが、じねん「その人のこと」を奪つてしまうことがあると思ふからです。

生徒たちを取り巻く社会状況は年々変化し、さまざまな情報があふれています。そんな日常生活においても、生徒たちが毎日の生活を送っている「学校」の存在は変わらず大きいものです。学校や学級の集団がどんなものであるか、自分の気持ちを何でも話せる人はいるのか、安心で

きる居場所はあるのかなど、どちらも大切にされなければならぬことです。そして日々生徒たちと向き合っている先生のことばやものの見方も、生徒たちに大きな影響を与えるものだと感じています。

だからこそ、まず授業や普段の生活において人権を意識して生徒たちと接することを大切にしたいと思っています。特別に身構えることなく（場合によつては「身構える」必要もありますが）、生徒たちが固定観念や社会通念、偏見に囚われることのない多様なものの見方を身につけることのできる教育の営みを日々の生活の中で積み重ね、より確かなものにしていきたいと考えています。ただそのときには、こちらからの一方的なものの見方の押しつけになることのないように心がけています。

私たち一人ひとりが「ありのまま」の自分でいることが尊重されている社会は、人権が保障

そんなときはもちろん、他の人が「その人らしく」生きる権利を侵害されるような場面でも、そのことを「他人ごと」ではなく、「自分ごと」として考え、その解決のために、ともに行動していく人であってほしいと願っています。そのときに、学校で身につけた正しい知識や多様なものの見方が大きな力になってくれることでしょう。

このように生徒と向き合う教職員としての役割の大きさを考えたとき、自分自身の人権課題に対する意識をより高め、感覚をさらに磨いていくことが大変重要となります。今までの経験や知識に甘んじることなく、他の実践に学び、研修や本などを通じて、自分自身が日々学び続けていくことも大切にしていくたいと思っています。



權教育教材集·資料
(亞成22年重版)

(大阪府教育委員会 H23)

全ての子どもに配布されていた読本「にんげん」が、平成20年から学校設置用となりました。背景には様々な事情がありますが、人権教育を進める環境という観点では、後退したと言わざるを得ません。そんな中、なんとかしてピンチを挽回しようと作られたのがこのCD。

「にんげん」シリーズに掲載されている教材のデジタル化はもとより、時代の流れに合わせた書き下ろし教材、さらには、「いま どんな きもち」の絵力一代やサイコロといった大阪府人権教育研究協議会（大人版）作成の教材など、使

わたしの人权教育

第一中学校 西川ひとみさん

された居心地のいい社会といえます。しかし、生徒たちは今後、「ありのまま」の自分でいることが脅かされるようになることに出

学校のお宝発掘

育教材集・資料